CATCH the NEW!

MUSIC エヴリシング・シー・ウォンツ

懐かしくも新鮮な息吹感じる 大人のラブソング、E・S・W。

女性VO福田康子と元オフコースの松尾一彦によるバンド、エヴリシング・シー・ウォンツ（以下ESW）がアルバム「エヴリシング・シー・ウォンツ」を発表。松尾氏かねてからの構想だったこのバンド。そのサウンドは、骨のある60～70Sのロックと歌謡曲の優しさを持った福田のVOが織り、成す、懐かしさと新鮮さを併せ持ったもの。

ーもともとVOが女の子のバンドがやりたかったんですよね。

松尾「うん、あのねフリートウッド・マックが好きだったから。僕が中学～高校生くらいにバンドやり始めた頃から好きだったバンドだったから、ずーっとやりたかったの」

ーでもフリートウッド・マックのスティービー・ニックスって割には福田さんはえらい可愛いですよね。

松尾「（笑）今のスティービー・ニックスはちょっとおばさんだからね。昔はねぇ、もう倒れそうなくらいにねぇ。声もすごく好きだったんだけど、あのサウンドにあの声がちょうど良かったんだろうね。昔は可愛かったよね」

ー福田さんは松尾さんと一緒にESWをやるようになってからスティービー・ニックスにはまったカンジ？

福田「完全に。（松尾さんと）会ってから知りました、はい」

ー最初はどう思いましたか？

福田「最初テープで聞いたんですけど、すごく個性的な声だなあと思ったんです。それでビデオを見て。あの音域の広さとか、あのルックスが可愛いですよね。今の彼女は……ですけど（笑）。昔はすごく可愛くて。パワーのある歌い方やタンバリンを持った独特の動きとか存在感とか全部気にいったんですよね。彼女みたいになりたいな、みたいな（笑）」

ー松尾さんの音楽的バックボーンは60～70Sの音楽ですが、アルバムの1曲目にかまやつひろしさんの曲「パン・パン・パン」のカバーが入ってるのにはやはりそういう思い入れがあります？

松尾「あります。あれは中学校くらいだと思うけど、僕は京都のタイガースの方が好きだったけど、でも同じくらいスパイダースも好きで、それであの頃のヒット曲を何か1曲やりたくて」

ー「パン・パン・パン」はレコーディングの時に初めて聴きました？

福田「いえ曲自体は知ってました。でも松尾さんのアレンジで全然イメージが変わりましたねー」

ーこのアルバムの全ての歌詞には、ある種メランコリックなイメージが保たれていますがそれは何故？

松尾「それは……歳かな（笑）」

ー（笑）アルバムには福田さんの他に吉元由美さんが作詞されてますが、詞を依頼される時ある程度イメージ提示されたと思うんですが。

松尾「うん、あんまり子供っぽいのは嫌だなってのがあって。それは彼女も同じく思ってて。ワザとそうするつもりはなかったんだけど自分達の納得の行くところといえば、この線かな、というカンジかな」

取材・文／早川加奈子　写真／大森康夫、協力／ポップ・ポイント、BMGビクター、クラフト

「エヴリシング・シー・ウォンツ」
BMGビクター／3000円

MUSIC DETERMINATIONS

噂のスカ・バンド、デタミネイションズの大阪ライブ。

去る4月4日、大阪はアンコールにて、デタミネイションズのライブがあった。ジャマイカにこだわり、スカを愛する彼らは20代の男性による9人編成のバンドである。関西を中心に活動する傍ら、昨年発売された7インチアナログ盤2枚とも、続けてレコード店から在庫が消えるという快挙を成し遂げ、東京でもその人気は過熱状態。リーダーであるドラム担当の高津直由にインタビュー。

ーメンバーはすべて関西出身だそうですね。

「はい。もともと6人たったんですけど、現在は9人でやってます。皆、バンドの他に仕事を持ってるんです。サラリーマンとか（笑）」

ー東京でも随分評判になってますね。

「若いコが多いですね。でも東京と大阪では反応が微妙に違うんです。東京の人って周りを気にしない。自分が楽しければ勝手に動く。みたいなのがあるんですけど大阪はもっとマニアックですよ。レコードから入るのが多いようで、そのへんライヴでは大人しかったりして面白いですね」

ーそれって意外ですね。じゃあ高津さん自身も関西のノリですか。

「もともとジャマイカン・ミュージックが大好きで。今こうしてレコード屋やってますけど、以前もわざわざジャマイカのレコードを買うがためにイギリスまでよく行ってたりもしたんです。スカは流行りの音にみられがちですけど、実際のビークは既に3年前に迎えてましたよね。あんなに数多かったバンドも、今はほとんど消えてたりして」

ーでは今、本当にスカを好きな者のみが残ったということですか。

「そうですね。本当に好きでやってるって感じですね」

ーアナログ盤のよさは？

「んーそう聞かれると難しいんですけど、やっぱり雰囲気が一番ですか。今度出すのもそうなんですけど、僕が好きなのはジャケットにも絵がない。真っ白なやつなんですよ。本当はもっと派手にしたほうがいいのかもしれないけど（笑）。でも売れる売れないに関係なく、ジャマイカのアナログ7インチの雰囲気が好きなんですよ」

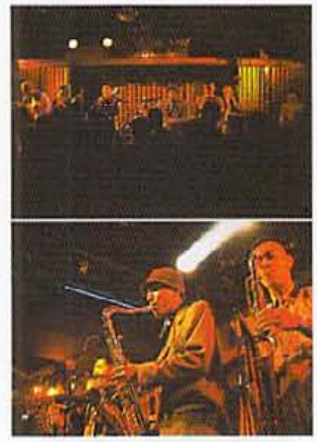
ーじゃ、その次回作について。

「5月10日に出てるんですけど、僕らの5枚目です。リー・ペリーのカバーで『ウッドマン』を演ってるんです」

ーファンにメッセージをどうぞ。

「え～っ難しいな（笑）。そうですね、リキますに、オーセンティックにやっていこうと思ってます」

取材・文／木村紀子



WOOD MAN／WEED MAN VERSION
／800円

MUSIC アルチュール・アッシュ

子供の頃の自由な発想に立ち戻って、また新しいものを作りたいと思ってるんだ。

ジャズ、シャンソン、ロック、ミュゼットetc。雑多な音が混然一体となったユニークなサウンドに、一度聴いたら忘れられないしゃがれたVO、猥雑でペーソスがあって芸術的な詞。フランス人アーティスト、アルチュール・アッシュのクリエイトする音楽は、しばしばセルジュ・ゲンスブール、ボリス・ヴィアン、トム・ウェイツといったアーティストと並んで形容されるが、それは似ているからではなく、彼らと同じく独自である、という点だ。CMでお馴染み「スローなフギにしてくれ」をフランス語でカバーしたり、オリジナル・ラヴの「セッションズ」に参加したり、と日本の音楽シーンにも親しい彼が来日。2度目の大阪公演は大いに盛り上がった。

ーアルチュールさんはパリ18区というアフリカやアラブからの移民の人達が多く住む場所に住んでられるそうですが、そこに住んでる音楽的利点は？

「住んでる環境は音楽をクリエイトするのに大変重要なものだよね。以前はサンポールという歴史的な地区に住んでいて、そこはお化けが出てくるようなところだったからアルバムにもそういう雰囲気のものが多かったかもしれない。今住んでいる地区は、自然とリズムが溢れてて、だから楽しいようなカンジの音楽が増えてきたかもしれない」

ー増々新作への期待が高まりますが、曲作りやレコーディングは進んでる？

「いや進んでないんだ。どうしてかって言うと……すべてを変えたいんだよ。今までやってきたこと。例えば曲のスタイル、歌い方。全く違った新しいものをやろうと思ってるから時間がかかってるんだよ」

ーアーティストは常に新しいものをクリエイトするもの、ですがそこまでガラリとスタイルを変えたい、と思った理由は何なんでしょう？

「自分自身、自分でやってきたことに疲れていて。ごちゃごちゃしたものでなく、もっとシンプルな、例えば子供が何かやらかすような、純粋"で"自由"な発想でやってみたいんだ。画家のゴーギャンが好きなんだけど、彼の言葉に『本当にやりたいものがあったら子供時代に戻ってみよ』というのがあるんだよ」

ーということは音楽的にも自分のルーツに戻る、ということ？

「その頃持っていた自由さ、に戻りたい、だね」

ー精神的に、ということですか？

「そう本当に心理的に、ね。子供ってよく突

MUSIC 谷理佐

パリに似た京都、発 フレンチ・ボサノヴァ

NY生まれ。パリ育ち京都在住。「ボサボサ」というバンドで西部講堂やアザーサイドにてライヴ活動を行なっていた谷理佐がアルバム「素敵を探す」でソロデビュー。ピチカート・ファイブの高浪敬太郎、ザ・ブームの宮沢和史、ゴンチチのチチ松村らが作編曲で参加しているフレンチ・ボサノヴァな作品だ。仏英共にペラペラ、京大出身という才女、谷理佐にインタビュー。

ーNYやパリにも住んでられた谷さんが今京都に住んでられるのはナゼ？

「3年毎に引っ越す、というような暮らしをやってて、どこに行っても私はヨソ者なんですね。でもヨソ者に対して寛容な街って気がするんです、京都は。

ー その逆のイメージありませんか？

「もちろんディープなところにいきなり新参者が入りこもうとしたらハネのけられるのは当たり前なんだけれども、外から人がやって来るという状況に京都の人って慣れてるじゃないですか。だから外からやって来た人が自由に活動できる場所ってのも残しといてくれてるんですよね。ある程度距離は保っていても受け入れてくれてる気がするんです。私は、それってパリに似てると思うんですよ。古い街で、でも国際都市だし、住んでる人はプライド持ってて、新しいコトが好きで。あの街で外国の文化やワールドミュージックが花開いたりするようなところが似てるな、と。私の人格形成がなされた中学～高校の頃にいたのがパリという街だったので、すごく居心地いいんです。時間の流れ方とか、これが人間の本来あるべき姿だな、ここに決めた、と思ったんです」

ーボサノヴァは谷さんの原点？

「ボサノヴァもブラジルというよりもポルトガル寄りのヨーロッパ経由のものの方に魅かれたんですね。パリで育った内に知らない間に色んな音楽が耳に染みついたみたいですね。フランス人てボサノヴァとかブラジル音楽って好きなんですよね。異国情緒みたいな点で好きなのもあるけど。ピエール・バルーもブラジル音楽好きですよね？」

ーピエール・バルーといえば日本のアーティストが参加した彼の「花粉」というアルバムと谷さんのデビュー作って手触りが似てませんか？フレンチ・ボサ、というところとか、色んな人がそのアーティストに曲提供して参加している、という点も含めて。

「（笑）言われて納得、というか。私は外人か、みたいな（笑）。そうですよね、私がボサノヴァ好き、と言うのってフランス人がボサノヴァ好きって言ってるのと同じなんだろうな、と思うし。そうかもしれないなー」

取材・文／早川加奈子
協力／ヒップランド・ミュージック、イーストウエスト・ジャパン

「素敵を探す」谷 理佐
2500円（税込）／イーストウエスト・ジャパン

然変なことをやらかしたりするだろう？僕はよく子供の時に身体の一部を使って音を出したりするのが好きだったな（笑）」

ー？？？でシンプルなんですよね？

「むしろ"自由"と考えてもらった方がいいかな」

ー成程。あなたの作る音楽っていわゆるフレンチ・ポップスともフレンチ・ラップ～ヒップホップのシーンとも一線を画しますよね。そして異国人から見た"パリ"のような一種普遍の時代感覚を持っている・・・。

「そうだよね。自分達がそうなのかどうかとか、これからもそうであり続けるかどうかわからないけど、自分でもそういう普遍的な存在であればいいな、とは思ってるよ。フランスのイメージにしてもある意味ではそういうものかもしれない」

ーライヴでのステージングはとてもスペクタクルで、旧き良き時代のキャバレー的演出ですよね。あなた自身キャバレーで演奏していたキャリアの持ち主ですが、私は個人的にあなたのステージはフェリーニの映画的に思うんですが彼の映画の影響ってあります？

「その通りだよ。フェリーニはすごく好きな監督で、彼に触発されてこういう風になったってとこはあるよ」

ーキャバレーで培ってきたあなたの音楽を、広い意味でのクラブ・サウンドだと解釈することができるとすれば、あなたは94年的なクラブ・サウンド、例えばスーンｅｍｃやｍｃソラーに共感を得ますか？

「彼らに関しては、フランス語の詞の言い回し、それまで聴いてきた音楽、例えばラップやレゲエやジャズといったような共通点はあるよね。でも僕のやってる音楽っていうのは"より古いもの"ってタイプのものだけどね。今の音楽状況に関して言えば、ま、ラップは大好きだけどピンからキリまであるだろう？ピンは好きだけどキリは・・・。そういうカンジだね」

ーアメリカ市場に興味はあります？

「考えてない（笑）。実際すごく閉じた市場だからね。だからむしろ日本に来たいね。そっちのほうが興味深いな」

通訳／長野孝子　協力／カンバセイション、ポリドール　写真提供／神岡保之

アルチュール・アッシュ　67年生まれ。フランスの有名な音楽家ジャック・イジュランの息子でありながら苦労を敢えてH（アッシュ）と略してお乗る彼は、キャバレーで演奏を重ねた後、アルバム「アルチュール・アッシュ」でデビュー。92年に2ｎｄ「パシフスーク」を発表。その間伺推か来日公演を果たし好評を得る。南佳孝の「スローなブギにしてくれ」をフランス語でカバー、オリジナル・ラヴのＲｅｍｉｘアルバム「セッションズ」に作詞とVOで参加したり日本の音楽シーンにも積極的だ。代表曲に「クール・ジャズ」がある。

「アルチュール・アッシュ・ライヴ」
2500円（税込）／ポリドール

MUSIC

TAM TAM

"伝えたいのは大きな愛"
ポジティヴ・ラバーのポップス。

91年結成以来、パーカッショニスト&シンガーとしてオリジナル・ラヴ、ゼルダなどのサポート・メンバーとしても活躍していたマリと、ギタリストでポップ・メイカー、タカの二人によるキュートなユニット、ＴＡＭＴＡＭ（タムタム）が1stアルバム「とわとわ」をリリース。実はＴＶドラマ「南くんの恋人」主題歌「友達でいいから」はＴＡＭＴＡＭがオリジナル。今回ｖｏ&ｐｅｒのマリにインタビュー。

ーマリさんはパーッショニストとして数々のキャリアをお持ちですが、　TAM TAMでのマリさん＝ボーカリスト。パーカッショニストとしての局面を前面に出さなかったのはなぜ？

「リズムって自分の中ではすごく大きなものなんですけど、詞を伝えるとかメロディを歌うことがどこかに行ってしまわないように、敢えてブレーキをかけて。相棒のタカがすごくポップ感覚があるし、パーカッショニストってとこはライヴでも出せることたし。伝えたいことは詞や曲たし、まず一回極端にそういうところに重点をおこう、ということに」

ーアルバムの大半の歌詞はマリさんの作品ですが「友達でいいから」のような女心には、マリさんの現実的な恋愛観が盛り込まれてますよね？

「意識的にそうしてますね。自分もそういうとこですごく葛藤してるし。でも最終的には『君と僕の間の愛も宇宙的な愛に繋がる』と思ってるんですよ。今起こっていることも出会いも苦しいことも泣いちゃうことも全部自分の為にあるってことがわかれば、どんな辛いことも最終的には安心していられる、大丈夫たよってコトが一番伝えたいことなんですけど。それをＯＮＥ　ＬＯＶＥと言わず、自分らしい形で表現しよう、と。私も恋愛で悩んでそういうことに気付いたし。じゃそのままの自分を出しちゃおう、と。だから葛藤してるような詞が多いでしょ？揺れ動いてる、というか」

ーでもすごく自信に満ちてる気がしますけれど？

「スルド過ぎる（笑）。それは私の性格なんです。ポジティヴ・ラバー（笑）」

ー恋する女の子には励みですよね。

「昔は3年位しつこく片思いもしたり、執念深い（笑）。でも上手くいったけど」

ーやっぱり成就したんですね。

「成就したんですよ。人には"友達でいいから"と言っておきながら、その辺まとわりついて、最後にはＧＥＴする気じゃないか、とこの詞を解釈する人もなきにしもあらずかなって気はしますけど（笑）」

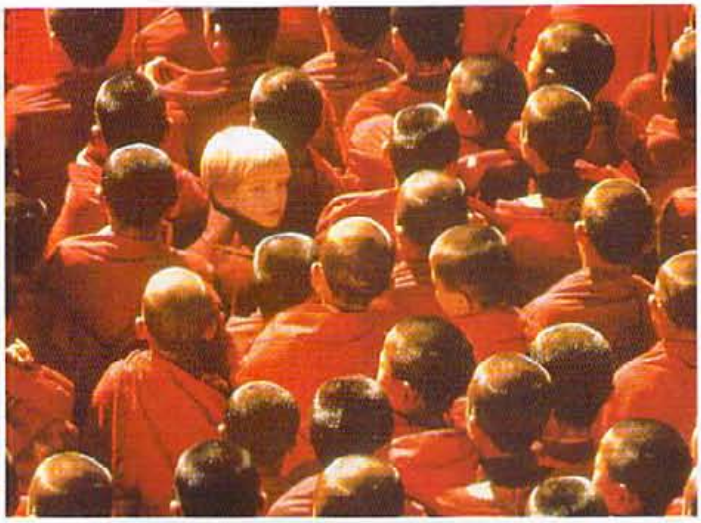
「とわとわ」TAM TAM／3000円（税込）／BMGビクター

協力／アップフロントエージェンシー、SIXTYミュージック、プロモーション大阪、BMGビクター

←TAM TAM
現在KissFM「フレッシュ・キッス」（毎週月曜）のレギュラーDJ、WOW WOW「モービル・ライヴ」（毎週火曜）のパーソナリティとしても活躍。

CATCH the NEW!

LITTLE BUDDHA



CINEMA リトル ブッダ

あなたは「生まれ変わり」を信じますか？

命あるもの必ず滅び、そして再び生まれ変わる。仏教徒でもなく信仰も持たないというベルトルッチ監督が、東洋思想の「輪廻転生」を見事に映像化してみせた。シアトルの若い夫婦のもとに、ある日突然チベットの僧だと名乗る男達が現れる。彼らが言うには、夫婦の息子である9歳のジェシーが、ブッダの魂を受け継いだ尊師ラマ・ドルジェの生まれ変わりだというのだ。真実を求め父親と共にブータンへ旅立つジェシー。そしてそこに、2500年前のシッダールタ王子のエピソードが絵物語のように重なってゆく。仏教に造形の深くない西洋人が観た時、どこまで核心に触れられるかという点では議論の余地がありそうだが、独創的な発想と映像美は圧巻。キアヌ・リーヴスはこれで『ドラキュラ』の名誉挽回といったところか、難解な役を見事にこなしている。

＊公開中

CINEMA エム バタフライ

破滅するために、生まれる愛もある。

心から愛し続けたものが、実は全て幻だったとわかった時。ひとはそれでも愛し続けることができるだろうか。これは北京で実際に起こった、仏人外交官とその愛人である中国人との信じ難い愛の記録をもとに作られた。時代に逆らう道ならぬ恋、だがそれ以上に女にはある秘密があった。神秘的な東洋女性に溺れ、身を滅ぼしてゆく男にジェレミー・アイアンズ。謎めいた歌姫にジョン・ローン。なんと彼は女性を演じているのだ。だがこれが第2の『クライング・ゲーム』にならないのは、西洋が東洋に対して抱く美しき錯誤、つまり自分が望む世界を相手に投影しその幻想を愛するという、最もはかなく、脆い愛を描いている故である。それは愚かな愛かもしれない。だが愚かでない愛などこの世に存在するだろうか。破滅もまた、愛が完結する一つの形かもしれないのだ。

＊6/4～7/1大阪三越劇場にて公開

M BUTTERFRY

CINEMA キリング ゾーイ

エキセントリックな運命に揺れる。愛と衝撃のもう一つのレザボア。

KILLING ZOE

クエンティン・タランティーノが、エグゼクティブ・プロデューサーとして放つもう一つの「レザボア・ドッグス」が「キリング・ゾーイ」である。ゲイでジャンキーでエイズ・キャリアの犯罪者エリックに、働きながら美術学校へ通いアルバイトに娼婦を選ぶゾーイ、天才的金庫破りのゼット。銀行強奪をめぐり振り子のように揺れる三人の運命の結末はいかに。てなストーリーはシンプルだが、レザボアでは描かれなかった銀行襲撃の凄絶なシークエンスや力強いドラック・パーティーシーンなど、大胆な構成と凝ったディティールによる面白さは抜群。ゾーイが、驚くほどしぶとくバイオレンスに立ち向かうなど「トゥルー・ロマンス」なシーンがちらほらするのも楽しい。狂犬のようなエリックにジャン＝ユーグ・アングラード、ゾーイにジュリー・デルピー、二人から愛されるゼットにエリック・ストルツ、と配された彼らのエキセントリックな演技も見物である。監督は「トゥルー・ロマンス」の脚本にも参加していたロジャー・エイヴァリー。初監督らしい荒っぽさの中にも、確かな愛と衝撃のある作品で鮮烈なデビューを飾っている。

＊6／25～7／8シネマヴェリテにて公開

CATCH the NEW!

京情緒あふれる石畳が迷路のように続く石堀小路の中に、一軒のギャラリーがある。こじんまりとしつつも、凛とした京の空気が絶えず流れている…そんな空間だ。ある日、この空間に異変がおきた。それは、色鮮やかな花、吸い込まれそうな深緑の海、一層の舟…。伝統ある京都の中に、一人の男が異国の風を吹かせたのだ。

ART ARTIST INTERVEW
1994・3・15〜24　立木義浩私的写真展

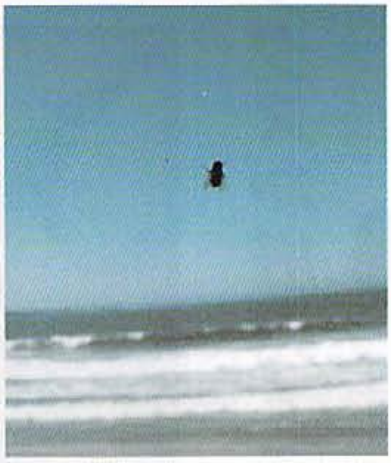
仕事とかプライベートとかじゃなく、面白いと感じた瞬間を常時、撮っていたいんだよね。

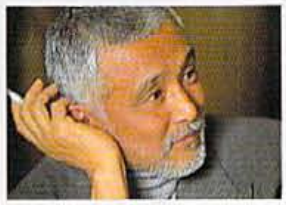
人生まるごと、写したい。

この場所で個展が実現したのは、飲んでいる時に誰かの展覧会を目にしたのがきっかけ。「このスペースで写真並べたら面白いな」と、つい口に出しちゃって、一緒にいた方が手配してくれて…僕はあとから連絡もらって「なんや、その話は?!」みたいな（笑）。今回の個展に西洋の風景写真を持ってきたのは、始めから強く意識していたわけじゃない。「ここでやるならマッチするものよりミスマッチの方が面白いな」と感じたから。写真や絵画や書道のような額に入れて人に見せるものは、ある一つの空間にポンと置いて初めて価値が出てくるわけ。だから空間が変わると価値も重みも変わる。作品自体の見方が変わってくるからね。そういうことを繰り返して、後から「日本的な空間の中に西洋の風景は面白いな」と具体的に理解出来るんだよね。僕は写真を撮る時に「プライベートだから」とか「仕事だから」とか、意識はしていない。面白いと思ったら撮る、という感じだね。今日だって何枚か撮ってるけど、プライベートだといってしまえばそうだし、違うといえば違う。基本的にカメラマンというのは、人生まるごと写真に写したいわけだから…。まぁ、プロになるとそうもいかないからね（笑）。それでも常時撮っていたいと思う。いいとか悪いとかの評価は人が決めるけど、自分にとっていい作品だったらそれでいいんだから。カメラの機種なんて何でもいいわけよ。使い捨てだって、何だって。自分がいいと思った瞬間さえ写っていればね。よく自分の美学を持って写真を撮る人がいるけれど、あれは良くない。美学を捨てることは難しいけど、「写真は、おおげさになってしまうことが一番つまらないことだと思うから。

すべてがコミュニケーション。

京都の風景でも、自分自身が好きな場所っていうのがいくつかあるけど、24時間OKって訳じゃないんだよね。季節とか、時間とか…。普段くだらない風景だなって思ってる場所が、ある時間帯になると、とても素敵に見える。特に空の状態で変わるんだよね。雲が芸したりするから。人間だってそうだよ。もし素人の女の子を僕が撮ることになるとするでしょ。もちろん女の子はプレッシャーを感じるし、きれいに写してもらいたいと意識する。でもね、そのコが彼氏とワンワンキャンキャンした後に、彼が写真を撮るとするでしょ。その瞬間、女の子のすべてが写るわけよ。それも美しく…僕はその写真にはかなわない。写真は被写体とのコミュニケーションが第一だから。ただ、プロのカメラマンは大勢の人に写真を見せるという、ある種の創られた世界で生きている人種だから、違いはでてくるけどね。本当の写真というのは写す側、写される側の人生の一部分を撮ったものだと思う。そう考えると、本当に写真を楽しんでいるのは、写真のことを何も知らない恋人たちだったりしてね。まぁ、それはあまり外には出てこないけど…（笑）。





立木義浩　YOSHIHIRO TATSUKI
写真家。1937年　徳島生まれ。　東京写真短期大学（現・東京工芸大学）卒業。アドセンター創立と同時にカメラマンとして参加し、1969年フリーとなる。以後、広告・雑誌・出版・映像など、幅広い分野で活躍中。

協力／ギャルリー石舟小路　和田
取材・文／藤本育子　写真／内藤貞保

Club Fame.

即戦力

スクランブル！スクランブル！
力のあるライター
腕におぼえのあるライター
この指令を受け次第、速やかに行動せよ。

スタッフ募集：ライター・セールスプランナー　※経験者にかぎる。
CLUB FAME：075-256-7555　担当　編集部